

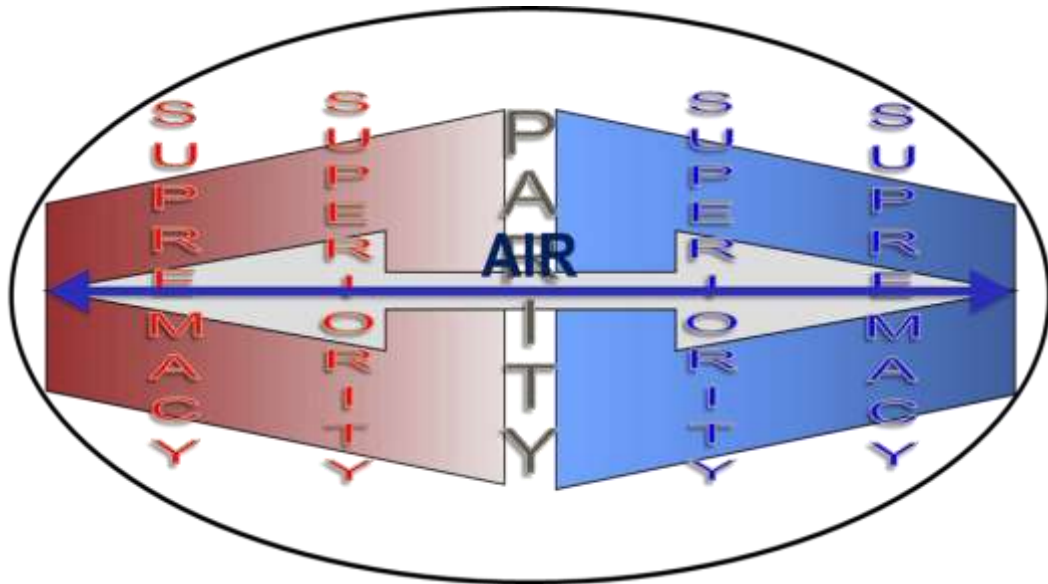
「令和の時代の『航空優勢』を考える」

荒木淳一 軍事研究2024年1月号、2月号

- はじめに
- 航空優勢の概念と現状等
 - 概念の起源と変遷
 - 航空優勢の概念と現状
 - 我が国における概念の捉え方
 - ウクライナ戦争における航空優勢と対航空作戦
- 令和の時代における航空優勢と対航空作戦の捉え方
 - 脅威と戦い方の変化の影響
 - 弾道ミサイル脅威の影響
 - 無人アセット脅威の影響
 - 新領域（宇宙、サイバー、電磁波）の影響
 - 新たな戦い方への対応
 - 航空優勢/対航空作戦の捉え方と防衛力の抜本的強化の7つの柱との関係
 - 令和の時代における航空優勢/対航空作戦の捉え方
 - 防衛力の抜本的強化の7つの柱との関係
- おわりに

航空優勢（Air Superiority）とは？

- 敵の航空・ミサイル脅威によって私の行動を決定的に制限禁止するような妨害を上kることなく、与えられた時間と場所で作戦を実行できる状態を指す。（AFDP3-01）
- 対航空作戦（Counterair Operation）の結果として生じる空における支配の度合い



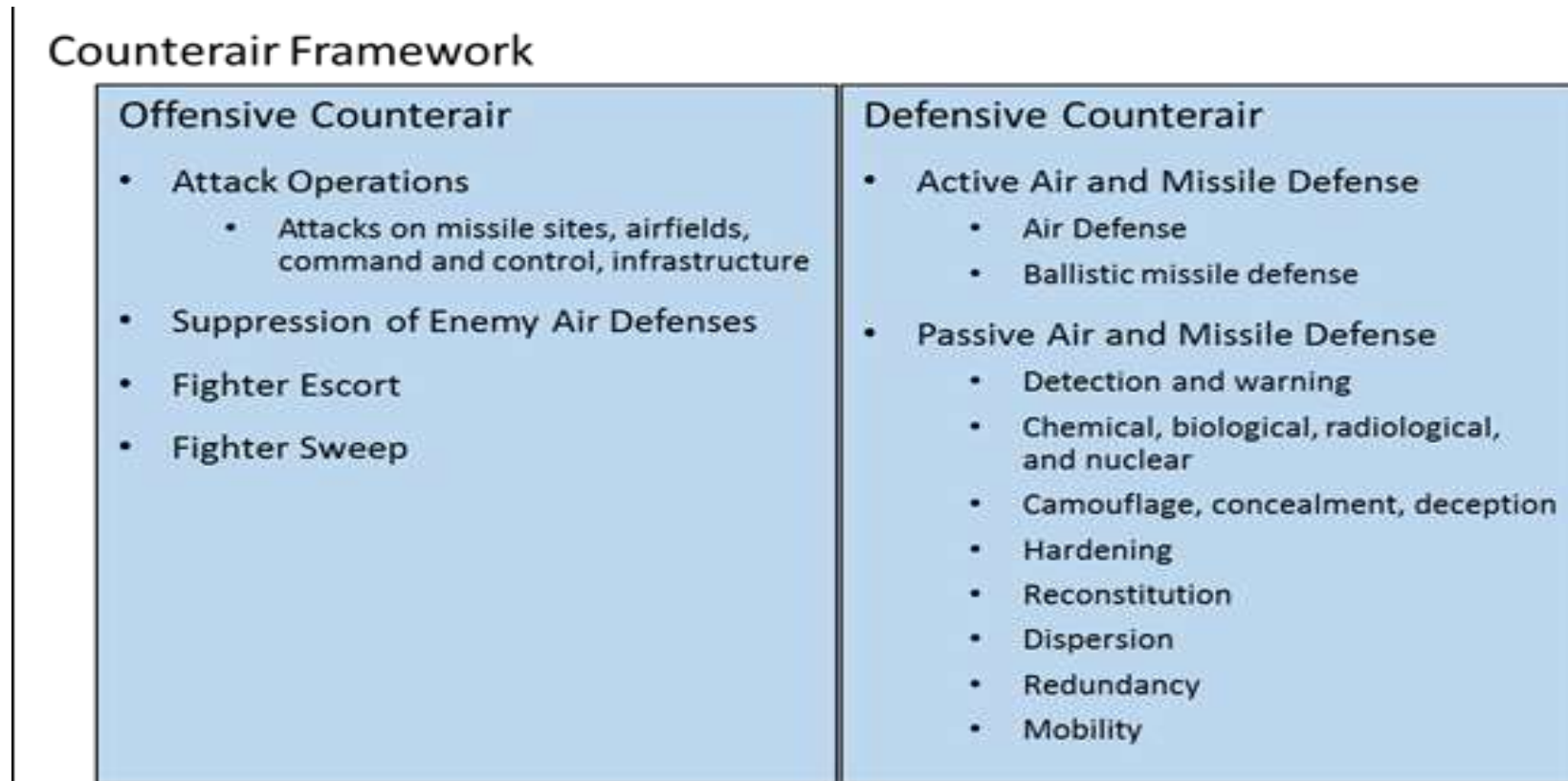
均衡（Parity）：彼我の何れもが空の支配が出来ていない状況を示し、双方の陸海空の作戦が敵の航空戦力によって重大な妨害を受けるかもしれない状態。航空攻撃やミサイル攻撃が行われていない状態ではなく、空の支配をめぐって彼我が闘ぎあう中で一時的に生じる状態

優勢（Superiority）：敵の航空・ミサイル脅威によって私の行動を決定的に制限・禁止するような妨害を受けることなく与えられた時間と場所で作戦を実施できる状態

優越（Supremacy）：敵が航空・ミサイル脅威によって我に対する効果的な妨害が出来ない状態。同等の敵との戦いでは達成が困難

対航空作戦（Counterair Operation）とは？

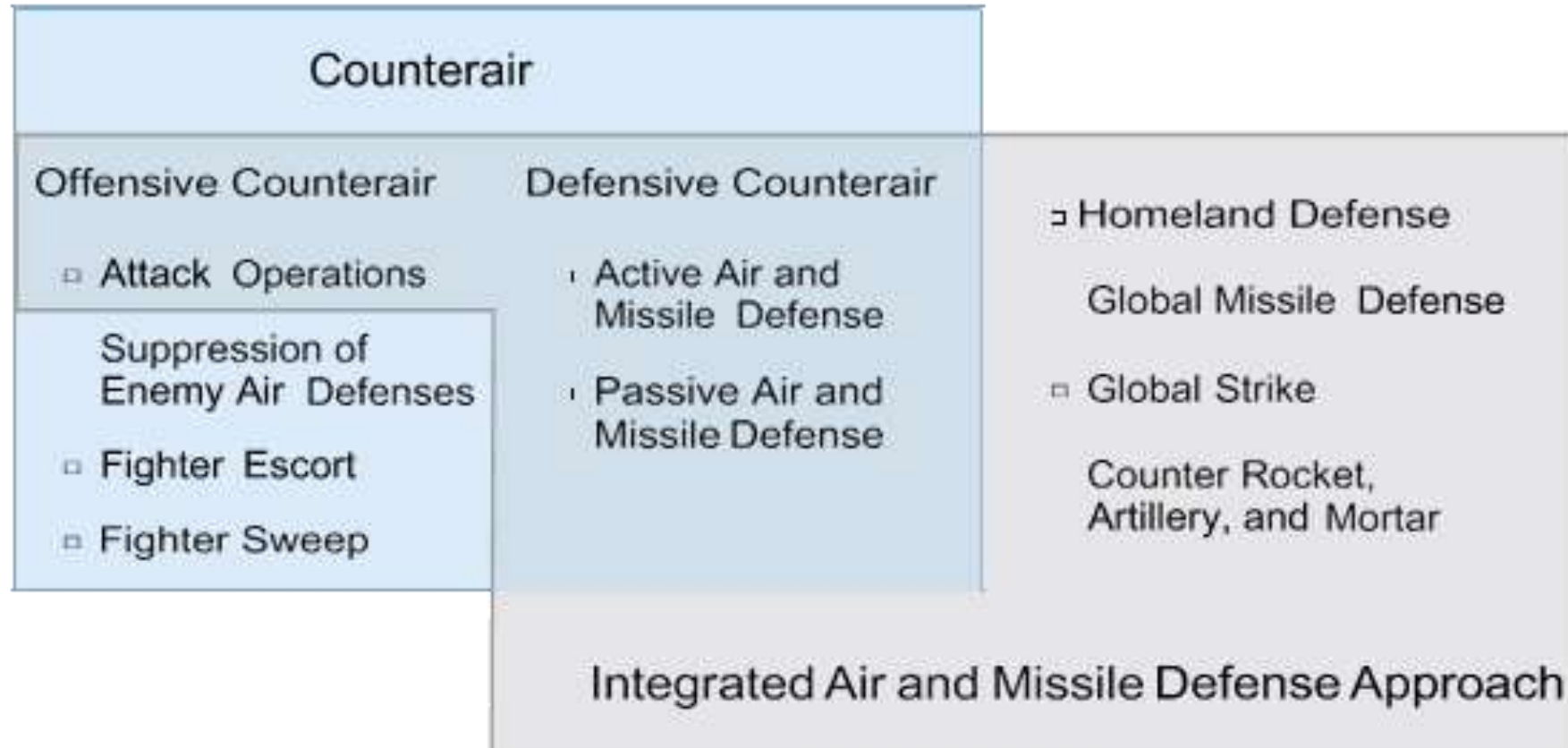
- 敵の航空機やミサイルを破壊または中立化することで望ましい程度の空の支配を獲得・維持すると同時に望ましい程度の防護を獲得するための攻勢・防勢の作戦を併せたもの
- 対航空作戦は基本的に戦域内での作戦



The Counterair Framework
(Based on JP 3-01)

対航空作戦とIAMDとの関係

The Relationship Between Counterair and Integrated Air and Missile Defense



**The Relationship
between Counterair
and Integrated Air
and Missile Defense**

(Based on JP 3-01)

留意すべき事項

- IAMDは敵の航空・ミサイル脅威を破壊・中立化する作戦（Active Air & Missile Defense）だけではなく、敵の航空・ミサイル脅威から我の陸海空アセット等を防護する作戦（Passive Air & Missile Defense）の相乗効果によるもの
 - ⇒ 消極防衛策、サプライチェーンの問題等とセットで考えるべきもの
- 米空軍が今考える航空優勢獲得は必ずしも湾岸戦争時のものを想定していない（同等の大国が相手）
 - ⇒ 拒否的抑止戦略で抑止すべきは敵の航空優勢獲得ではなく、敵の航空攻撃又は着上陸作戦等
- 空自の防空作戦の概念は必ずしも米空軍の積極的航空・ミサイル防衛作戦と同じではない。（Homeland Defenseを含んだもの）⇔統合作戦司令官が望む時と場所、程度の航空優勢を獲得するという考え方に本当に変わっているのか？全般防空作戦を実施することで間接的に陸海作戦を支援する昔ながらの考え方のままではないか。
 - ⇒ 作戦計画（VAや戦力配備、CAPの運用要領）が変更されているのか